

新たなる敵 STARTED A NEW ENEMY はじめました

神坂 一

Illustration やすも



Presented by
HAJIME KANZAKA

口絵・本文イラスト
やすも

装丁
AFTERGLOW

刹那、呼吸が止まる。

制服の第三ボタンが地に落ち——二つに斬り割られた。

——嘘だろ——

つぶやいたはずの言葉はしかし、ひゆう、とかすれた吐息にしかない。

頬に額に汗が一気に浮き出して、冗談のようにひざがふるえる。体がうまく動かない。

いや、体だけでなく思考でさえも。

——恐怖——

それは当然の反応だろう。

幅木一新の転校初日。

クレナイと名乗る、ツンツン頭のいかにも不良オーラを纏ったクラスメートの男に校舎裏へと呼び出され、ついに行ったら——

突如、相手が異形と化したのだから。

「よオクよけたなァ。今のヲ」

舌が口の中で余っているような、獣が無理矢理人の言葉を絞り出したかのような声で、異形は一新を嘲笑う。

半ばむき出しの巨大な眼球。ばさばさに乱れた金と赤と黒とが醜く交じった蓬髪。左右二本ずつ計四本に増えた腕の先にはねじくれた鎌のような長く鋭いツメ。

異形化は瞬時に行われ、ふり向きざまに一閃されたそのツメがさらに伸び、反射的に退った一新

のボタンを断ち落としたのだ。

「……な……? なん……? ななななななっ……!?!」

意味不明の声——いや、ただの音が自分の口から漏れていることに一新は気付いているかどうか。相手が突然化け物と化す。

マンガやアニメの中なら掃いて捨てるほどある展開だが、現実それが目の前で起きたら。我が身にふりかかって来たならば。

混乱と恐怖が思考を埋めて、何もできない。

——どうするっ……!?! どうする、どうしたらいい? どうするどうするどうするどうする……!?!

対策を必死で考えているつもりで、その実は『どうする』という単語を頭の中でただただ繰り返しているばかり。何も考えてなどいない。

うろたえ固まる一新に、異形はいぶかしげなまなざしで、

「なんだ……? 手ゴタエの無い……何者ダ? まさか本当二ただの転校生トいうことは無いダロウが……」

——何者——

それは問いかけというよりも独り言。

しかし耳にした一新は思い出す。

自分が一体何者なのかを。

こうなれば、話は早い。

一新の体が瞬時に変わる。同時に、たった今まで恐怖と混乱でざわついていた心が嘘のように静まった。

右手を異形に向けて突き出すと、腕に内蔵された粒子砲（ビームカノン）を低出力拡散モードで迷わずぶっ放した。

じゅっ。

「みびゅっ」

なんだかコゲた音と悲鳴。まっ黒になった異形は、ぼてりっ、とその場に倒れてびくびくケイレンする。

まだ生きている——はずである。さきほど一撃を受けたツメの硬度から計算して、殺さない程度に手加減したのだ。情報を引き出すためにも、即座に殺しては意味が無い。冷静ささえ取りもどせば、その程度の判断は即座にできる。

今——ここに立っているのは、もはや、男子中学生の幅木一新ではなかった。

「へ……変身……シタ……?」

倒れたままのクレナイ——異形は視線を動かして、かすれた息でつぶやいた。

「逆だ。変身を解いた」

人間サイズのスリムなロボット——地球人の目からは、おそらく自分はそのなふうに見えるだろう。

だがこれこそが、彼本来の姿。

「お前もそちらが本当の姿なのだろうか？ 答える。なぜ俺を襲う」

「……何者……ダ……」

「聞いているのはこちらだ。」

が、いいだろう。

俺の名はラーヴァキア。地球にとつての侵略者にして——魔女っ子メイミの新たなる敵だ」

「やはり……カ……俺ハ……」

異形が何かを言いかけた、しかしその時。

「ジブンら何やっとなねん！」

あたりに響く関西弁。

二人同時に目をやれば、いつの間にもどうやって出現したのか、そこには宙にぶかぶか浮かんだ、ライムグリーンの珍生物。でかいハムスターか小さいウサギといった感じの外見だが、無論ウサギもハムスターも関西弁はしゃべらない。

それが一体何なのか——もちろん知っていた。

どうやらクレナイも同じらしく、表情を引きつらせているが、珍生物はかまわずに、

「メイミがこっち来んで！」

言いつつ前足というか両手を、ぼんつ、と打ち合わせた。

そこから白とピンクと黄色との色とりどりの花びらがあたりに散って消えた時には、クレナイの

コゲた服や火傷やけども瞬時にもと通りになっていた。

粒子砲の余波があたりの草や木を多少なりとも灼やいたはずなのだが、今見るとそんな痕跡こんせきもない。

ラーヴァキアとクレナイは顔を見合わせ——

二人が人間の姿に戻る——いや、化ける。

一新は中学一年生にしては背が高い方。顔立ちは、平凡、という他はない。

対するクレナイは吊り目のやや小柄な姿。染めているのか地毛なのか、ビミョーな明るさのツンツンくせっ毛。

さっき斬り落とされた一新のボタンまでがもとに戻って、ちゃんと制服にくつついているのは、一体どういう原理なのか。

クレナイはあわてて立ち上がると大仰なしぐさであたりを指して、わざとらしく声をはり上げた。

「——聞くがいい転校生！ これがつ！ この場所こそがつ！ 校舎裏だッ！」

「嘘だろっ！ まさかそんなものが本当にあったなんてっ……！」

アドリブで適当な寝言を交わしていると。

「あ。」

ひょこりっ、と。

校舎の角から顔を覗かせたのは一人の女の子だった。

腰までの髪に大きな目。ブレザーの制服がだぼについているのは、親が成長を見越して大きめサイズを買ったのだろう。

今もだが、授業中なども常にずっと口を半開きになっているのが、あどけない——というよりどこかアホっぽい。

「何やってるの？　こんな所で」

彼女が顔を出したその時にはすでに、ライムグリーンライムグリーンの珍生物はとっくに姿を消している。

「あ——ああ。クレナイに学校を案内してもらってんだ」

一新が適当なことを言うと、クレナイも話を合わせて、

「庭木があつて陽が当たらねえから、暑い時に涼むのには悪くねえんだよな、ここ。……つていうか、そっちはなんでこんな所に？」

「ああ、うん、ちよつと通りかかっただけ」

言つてほえむ彼女こそ、南砂中学一年C組のクラスメート、美幌鳴実——
いずれ一新が戦うことになるはずの、魔女っ子メイミ、その人だった。

なぜこんなことになってしまったのか。

そもそもは、四日前の夜に遡る。

——なんだ、これは——

夜空を背負い建物の屋上に佇たずんで、ラーヴァキアは内心、ため息をついた。

次の侵略目標となるこの惑星で、最大規模の戦闘反応を探知して、偵察にやって来てみれば——
広場で子供が二人、お遊戯をしているだけだったのだ。

機械生命体たる彼は、もちろんこの惑星の知的生物のことはよく知らない。しかし身につけた
全能翻訳機は、この惑星にひろがるネットワークから各種情報を収集・分析。必要な知識などをラ
ーヴァキアの脳に逐次送り込んでくる。

ここは比較的平和な国で、今いるのは、中学校とかいう教育機関の、校舎と呼ばれる建物だった。
眼下の広場——校庭で戦っているのは、女子中学生とカテゴライズされる二人。

学生用の制服を着用しているわけではないが、分析した生体年齢からすると間違いないだろう。

この惑星での通例からすればかなり異常な事象なのだが、そんなことより——
見ていてじれったい。

まさかこいつら、これで戦っているつもりなのか？

戦いの組み立てもかけひきもフェイントも無く、見るからにシロウトの動きで、異様にのろのろ
したピンク色のビームをでために放ち、それを場当たりによけたり、シールドのようなもので防
いだりしているだけ。

測定結果によれば、ビームもシールドも高出力のはずなのだが、使う者の技量が全く見合っていない。

そもそも着ている服からして、無駄にひらひらした、動きの邪魔になりそうなもの。おまけに髪を、なびくほど長く伸ばしている。戦いに向いているようには思えなかった。

——これから侵略しようとしている惑星の連中が戦い下手なのは歓迎すべき状況だが、それにしても、これはひどい。

ひよっとしたら何かの演習か訓練なのだろうか？　しかしそれなら、武装の威力が高い意味がわからない。

ならば。

ラーヴァキアは右腕に内蔵された粒子砲を無造作に放った。

——見るだけでは判断できないため、軽く一戦交えて、相手の実際の戦闘力を推し量る威力偵察に切り替えたのだ。ここが侵略対象地である以上、いずれは戦わなければならない。

一撃は狙い通り、二人の間の地面を穿ち赤熱させた。

さすがに子供二人も気がついて、

「な……!?!」

「誰っ!」

見上げた二人はおそらく、校舎の上に佇んだ、スリムな装甲服のようなラーヴァキアのシルエットを目にしたことだろう。



だがその瞬間――

「ジブン、何さらしてくれとんねん!」

何者かの声とともに、ラーヴァキアは首の後ろをひっ掴まれて、おかしな場所に引きずり込まれていた。

――おかしな場所――

なんともあいまいな表現だが、そうとしか言いようがない。

つい今し方いた夜の屋上とは、完全に別のどこかだった。

あたりを覆う大雑把で丸っこい草花。幹が不自然に弧を描く木々。その合間から見える空。

それら全てがふわっふわしたミントカラーで、太陽らしきものも見当たらないのにまわりは明るい。

たった今まで自分がいた場所につながりそうなゲートなりなんりのようなものは見当たらず、そのかわり――ラーヴァキアの右斜め前すぐそばに、全高二十センチほどの、もこもこした生き物が浮いていた。

この惑星――地球の生き物にあえてたとえると、大きなハムスターかウサギにイメージが近いだろうか。しかしいまだ繋がっているこの惑星の情報ネットワークによれば、どちらもこんなライムグリーンの色をしていないし、ぷかぷか宙に浮いたりもしないはずだった。

状況はわからない。だが、原因の一端はおそらく目の前の生き物。

そう判断したラーヴァキアは、躊躇も予備動作もなしに右腕の粒子砲を発射した。

急所を外して痛手を与え、情報を引き出す――つもりだった。

が。

「そういうのええねん!」

ライムグリーンの珍生物は言葉と同時に、短い前足の甲で、べしん! とビームをはじきぞらす!

――!?――

ラーヴァキアは驚愕する。

小出力での発射だったが、この惑星の硬貨を撃ち抜く程度の威力はある。至近距離で放たれた亜光速のそれを、相手は前足でたやすくいなしてのけたのだ。

――一体どういう理屈だ――!?

刹那に検索したネットワーク情報から酷似した動作を発見。芸人の裏手ツッコミというらしい。しかしこれは戦闘術ではない。

戦士としての本能がけたたましく警鐘を鳴らす。何か、とてつもなくまずい事態になっているという確信があった。

この世界から抜け出す算段は立っていないが、まずは相手から距離を取る。

地を蹴けると同時に重力ベクトルを変更、併せて各部の推進器を全開、一気にその場を跳び離れる。ヤワな生き物なら圧死しかねない急加速の中、まわりの景色はミントカラーの奔流と化し――その中で。

「何や何や？ いきなりビーム撃って効けへんかったらソッコー逃げかい？ ジブン、ホンマわっかりやすいなあ」

珍生物はラーヴァキアの右斜め前、全く変わらない位置にぶかぶか浮きながら、あきれたように言い放つ。

——ありえない——

方向転換の後急加速したラーヴァキアに、相対距離どころか相対位置すら合わせ続けるなど不可能である。

なら虚像のたぐいか？ 何らかの方法でラーヴァキアの光学と音響情報に干渉し、ありえない珍生物を幻視させているとでも？

さきほどこちらの撃った粒子砲も、本当にはじいたわけではなく、そういう虚像を見せられた、と考えた方が無理がない。

攻撃も逃亡も効果が認められないなら、今はせめて情報を集めるしかない。仕方なくラーヴァキアは停止した。

「そうそう。最初っからおとなしいしとつたらええねん。ま、ジブンらは実際にいろいろやってみると、無理ってことがわからんのやろうけどな」

珍生物は短い前足で器用に腕組みして、こくこくうなずきながら言う。

相手が使っているのはこの惑星のローカル原語。『ジブン』というのは場合によって、お前、の意味にも使われるらしい。

「何だお前は——」

ラーヴァキアが発したのはまぎれもない日本語だった。

無論、本当に話している言葉は違う。

ウヰム・ジゾノ——設定レベルに従って、言語はもとより、価値観や概念、果ては身体感覚や外見まで、対象と似たものに翻訳してしまう装置。この惑星に同じ概念のものは存在しないが、あえて言うなら万能——いや、全能翻訳機とでもいったところか。それを言語のみの翻訳モードにしていればこの通り、会話には何ら不自由することは無い。

珍生物は侮蔑よぼのまなざしをこちらに向けながら、

「何て。人に名前聞くんやったらまず自分から名乗るのが普通——」

ちらりっ、と、ラーヴァキアの右肩に刻印された紋章に視線を移して、

「……と、言いたいとこやけど、まあええわ。」

ギナザン所のマズガミアのモンやろ」

「なにっ……」

ラーヴァキアはさすがに驚愕の声を漏らした。

相手の指摘は正しかった。

十一の銀河、五百六の惑星と種族を併呑へいどんし、いまだ勢力の拡大を続ける帝国、マズガミア。

そしてその支配者たる超越者、征帝ギナザの名前は広く知れ渡っている。

確かにラーヴァキアは、新参ではあるがその幹部だったのだ。肩にあるのは帝国の紋。

とはいえ、外宇宙にも出たことのないこんな辺境惑星の、正体不明の珍生物が、マズガミアの名を知っていると思ってもいなかった。

しかし相手はあきれたように、

「何びっくりしとんねん。紋章見たら丸わかりやん」

「——どうやら全くの無知というわけではないようだな——」

「えつらそんな奴やつっちゃな。ひよつとしてジブン、新入りか？ ならあれこれ言うても無理やなあ……ん」

珍生物はしばし考えてから、

「よし！ ならこうしよ！」

今から帰したるから、ギナザン所行って、『まほうの国ファンシーラのリファっちゅう奴に会ってきた』言うてみい」

「魔法の国ファンシーラ？ 今から帰す？」

リファというのが珍生物の名前だというのは察しがついたが、他のことは意味不明。とまどうラヴァキアをよそに、リファは一方的に、

「ほんならやるで。ほいっ」

前足だか両手だかを、ぼんっ、と打ち合わせた——瞬間。

合わせた手のあたりから白とピンクと黄色との、花びらのようなものが無数に噴き出し舞い散ると、刹那視界を遮って——

暗転。

花びらが目の前を通り過ぎたあと、あたりにあるのはただの黒。

——何をした？——

言ったつもりの言葉はなぜか声にならなかった。

状況を確認するため各種探知機センサで周辺情報を集め——

——なにっ……

驚愕し、首を巡らせた拍子に体がゆらぐ。

流れる視界には、黒に散らばる無数の小さな白い点。

——宇宙——

ラヴァキアの探知機センサは、彼が今、太陽系の端、天王星てんのうせいと呼ばれる惑星の近くにいると告げていた。

さきほど星々の輝きが見えなかった理由は単純。すぐそばに黒い壁が存在したからなのだ。

直径およそ十キロメートル。一見ただの小惑星にしか見えず、遠距離からの探知にもそうとしか映らない。

だが——違う。

これこそがラヴァキアの所属するマズガミアの本拠、惑星要塞ようさいトワイノーマ。

もちろん本拠の全貌ぜんぼうではない。

どことも知れぬ亜空間に存在する直径二万キロの天体の表面からは、長い長い柱がびっしりそそ

り立ち、柱それぞれの先端は距離を無視して侵略対象地近くの通常空間に現れ、出撃と帰還の口となる。出現したその部分がこのように見えているのだ。

——しかし——

たった今まで第三惑星にいたラーヴァキアを、一瞬でこんな所まで送りつけるとは——亜空間技術を使えば不可能ではないのだが、探知機類でチェックしても、そういったものが使われた痕跡は見つからない。

なおかつこの場所に——ということは、あのリファと名乗った生き物は、出撃端末の位置を知っていたことになる。

魔法の国などとふざけたことを言っていたが、いずれにしろ、底の知れない相手であるのは間違いない。報告して指示をおおぐ必要はあるだろう。

姿勢を制御し右手で出撃端末の表面に触れ、名前と所属を述べる。もちろん空気のない宇宙で音は出ないが、声は震動となり接触した手から伝わり、ラーヴァキアにも知らされていない何かの方法で確認されて——

ずっ、と。

ラーヴァキアの右手が沈む。

ぬかるみに没するような速度で、手の先からどんと黒い壁に沈み込んでゆき——
抜けた。

そこはまっすぐな、白。

直径十キロの円筒形の通路は、ライトに煌々と照らされて、どこまでもどこまでもまっすぐに続いており、彼方は白に溶けて見えなくなっている。

そこを奥へと進みながら——ラーヴァキアは迷っていた。

報告する必要があるにしろ、この事態を、一体どう語ったものか。

彼は一応幹部ではあるものの、幹部の中では新参で下級。組織の規模が巨大だけに、気軽に皇帝に会いに行くことができるような立場ではない。上級幹部の取り次ぎが必要だが——

——魔法の国の珍生物に不思議な力であしらわれて、くわしくは征帝ギナザに聞けと言われた

そんなことを口走れば、取り次いでもらえるどころか、間違いなく、即座にメンタルケアを受けさせられるだろう。

しかし、それは杞憂だった。

行くうちに、通路の先に巨大な球体が見えて来た。

——なんだあれは——

似たような外見の存在に、心当たりがないわけでもないのだが、こんな場所で出会う相手ではないはずだ。

近づくにつれて、その大きさも徐々に増し、姿もはっきりとしてくる。

直径は三十メートルほどか。半透明の球体の中に、ひと回り小さい半透明の球体が入っており、さらにその中に——と、無数の重なりを見せている。

これは——間違いない——

「ラーヴァキア——ですね」

それは、減速するラーヴァキアに声をかけてきた。

もちろん人類の言葉ではない。球体の表面が震える音は、地球人の耳にはたゆたう水音のようにか聞こえないだろう。

しかしそれこそが彼らの言語。ラーヴァキアの種族が使う言語とは違うが、全能翻訳機が問題無く相手の意図を伝え来る。

「……なぜ……あなたが……？」

呆然と、ラーヴァキアはつぶやいた。

無数に重なる半透明の球体——地球で暮らす人類からは、とてもそうとは見えないだろうが、それは一個の生命体だった。

その名はマーテスラ。征帝ギナザの右腕とすら言われる最上級幹部で、実質このマズガミアのナンバー2。

やはりラーヴァキアが気軽に会えるような相手ではないのだが——

「ついて来なさい」

マーテスラが言う。

「征帝がお会いになります」

「征帝が!? なぜ——！」

「ここで語るべきことではありません。同行してもらえますね？」

偵察に失敗したのを咎められるのか？ いや、それならマーテスラほどの相手がわざわざ出て来る必要は無い。

ならば心当たりは——しかしまさか——

とまどいはあるが、いずれにしても拒否はできない。

「——了解しました」

「では」

マーテスラの体が大きくふくらむ。注意していれば、ふくらんでいるのは無数に重なる球体の一番外側だけだと見て取れた。

ふくらむ球はラーヴァキアの肉体をすり抜けて包み込み——再び球が縮んでラーヴァキアを解放した時、二人は全く別の場所にいた。

茫漠たる空間。

そうとしか表現のしようがない。

広いことは確かだが、それ以外のことはラーヴァキアにさえわからない。光源もなく薄い灰色がひろがるばかりで天も見えず地も見えず。そのくせ重力はあるらしく、感覚で上下はわかる。足は何かを踏みしめて立っているのだが、目をやればしかし床は無く、そこも遠く薄灰色に霞消える虚空。

見た目は地味な場所だが、ラーヴァキアは知っている。

この場所こそが玉座。マズガミア帝国の、惑星要塞トワイノーマの中核部なのだ。

彼から見て右斜め前には無限球体マーテスラの姿。

左斜めには、地球人が楽器として使うトリアングルを、大小いくつでもたために組み合わせたオブジェのような生命体。

大きさはラーヴァキアと大差ないものの、マズガミアでの地位はかなり違う。最上級幹部の一人、ナンバー3とされるカノーフォ。

そして正面――

長さ五十センチ程度のクリスタル柱、屹立まっぴりつしたそれが数万、数十万――へたをすれば数億か。魚群のように集まりたゆたい、上下にして二百メートルほどの流線形を成している。

地球人の目からは無論、機械生命体たるラーヴァキアから見ても一個の生命だとは理解しがたいその姿。

かれこそが。

十一の銀河の覇者。この玉座の主にしてマズガミアの帝王。

絶対支配者、征帝ギナザ。

もちろん外見は知ってはいしたが、間近に会って話をしたことなどは無い。場合が場合なら、緊張とプレッシャーで体が動かなくなっていたかもしれない。

「よっ」

偉大な征帝のその横に、ライムグリーンの珍生物がしれっと存在し、気安く声をかけて来たことが、彼にプレッシャーを忘れさせた。

「貴様なぜここに――！」

ラーヴァキアは反射的に右手の粒子砲を構え――

「ここここらラーヴァキアくん落ち着け落ち着きたまえ！ 下ろしてっ！ 武器下ろしてっ！ 早くっ！ いーから早くっ！」

征帝のあわてた声に従って、釈然しやくぜんとしないまま右手を下ろすと、絶対支配者たる水晶柱の群れは、リファと名乗った小動物にへこへこしながら、

「いやこのたびは部下がとんだことを。教育の不行き届きはひとえに私の不徳の致すところ。どうかひとつ――」

取引先にあやまりに来たサラリーマンのような口ぶりに、リファは鷹揚おうえいように手を上げて、

「まあええよ。最近入った奴なんやろ？ そら知らんのも無理ないって。

いや、知ったつても実感無いから信じられへんやろ」

「そうおっしゃって頂けると助かります」

「ただまあ――ちよいとしたつじつま合わせには付き合ってもらうことになるで？ 元々そつちがやらかしたことなんやからな」

「それはもう喜んで」

征帝の腰の低い返事に、リファは満足げにうなずくと、ラーヴァキアの方をふり向いて、

「——ちゅうこつちゃ。よろしゅうな」

「何の話——なんですか……一体どういう……?」

ラーヴァキアは混乱する。

何なのだ。この状況は。

誰に何をどう質問すれば納得のいく答えが返って来る?

対するリファは余裕の表情で、

「あー。帰って話聞いてみい、とは言うたけどな。聞いただけやとジブン、信じられへんやろと思てな。こーやって直接来て、先に話しとった、ちゅうわけや。

このマズガミアとワシらまほうの国は、昔ちよつといういろあつてな、まんざら知らん仲でもないねん」

「……………」

にわかには信じられない話だった。

しかし征帝ギナザをはじめとする最上級幹部たちの態度から、でたらめとも思えない。

「ワシらまほうの国の力の源は、愛とか夢とか、そういうふわっふわしたモンでな。

今、さっきの星——地球で、不思議な力を与えられた純真な女の子——魔女っ子と呼ばれとるもんをプロデュースして、花屋のお兄さんの初恋応援したり、ピアニストになりたい女の子の手伝いしたりして、愛や夢を集めとんねん」

愛? 夢? 魔女っ子?

——一体何の話をしているのだ——

ラーヴァキアは混乱して、ギナザを、マーテスラを、カノーフォを見やるが、嘘や冗談の空気は無い。

マズガミアのトップメンバーが一致協力して、彼のような下級幹部にドッキリを仕掛ける理由も見当たらず——

なら。

これは。

本当の話だということか?

「——戦っているようだったが——」

かろうじて言葉を絞り出す。

「そう! そこやねん!」

リファはラーヴァキアを指さして、

「魔女っ子はふしぎな力で誰かの夢を応援してナンボや。

けどな、いきなり不思議な格好した、よう知らん女の子がやって来て、『不思議な力であなたの夢を応援するよ!』とか言うても、普通の人間は信じれへんやろ?」

それはそうだ。普通は逃げるか、どこかに通報する。

「そこで、それまでに魔女っ子のことをみんなに認めといてもらわんとあかんねんけど、そのために必要なのが——」

と、胸をそらしてドヤ顔で、

「バトル要素や」

「……………」

助けを求めてマーテスラを見やる。目などないはずのマーテスラが、微妙にこちらから視線を外しているのが、なぜかラーヴァキアには感じ取れた。

かまわずリファは、

「人の愛と夢を壊そうとする悪い組織をやっつけて平和を守ったたら、世間様からの知名度も信頼もアップ！」

これやったら、夢を応援するとか言うても信じてもらえるわけや。

なおかつ、悪は倒れて正義は勝つ、ちゅう希望や夢も生まれるし。

ところが——や」

リファは、じろりっ、とラーヴァキアをにらみつけ、

「そっちの奴が、こっちの魔女っ子に威嚇射撃しおって、姿見られてなあ」

「そう聞いたが……事実なのか」

征帝ギナザの絶望に満ちた問いかけに——

「事実です」

ラーヴァキアは素直に答えるより他にない。

「さてそうなる」と

リファは言う。

「うちの魔女っ子にとったらそれは、『新たに現れた謎の敵』や。なら今の戦いにケリ付いたあと、出て来てその役、つまり次のヤラレ役をやってもらわんとな」

「そんな義理——」

「ラーヴァキア」

上げかけた抗議の声を征帝ギナザが遮って、

「特命である。協力を」

「……わかりました……ただ、後ほど詳しくご説明を——」

「うむ」

納得などできないが、征帝から直に特命とまで言われれば、こう答えるより他にない。

リファはへらへらした口ぶりで、

「心配すんなて。ヤラレ役言うても、ホンマに戦って死ねとか言わんから。

出番が来たら戦って、やられて死んだふりして終わり。あとは好きにしたらええ。こっちが魔女っ子プロデュースしてるところ以外のどこかでな。

もちろんタダとは言わへん。

きつちりやることやってくれたら、ちよっぴりやけど、ご褒美くらいは出したるで」

「ご褒美、ですか」

ギナザの問いにリファはニヤリと、

「ご褒美が何かは今は秘密や。しごとを終えてのお楽しみ、やな。」

——あ、そうや。

そっちの技術力やったら、地球の人間に化けて普通に暮らすなんて楽勝やろ？

どうせやし、学生として、うちの魔女っ子と同じクラスに転校してきてもらおか？ 出番が来たら言うから、それまでは普通にな。あ、うちの魔女っ子、ここらへんからくり全然知らんから、言うなや？ 魔女っ子や普通の人相手にジブンの正体がバレるのも、こつちがオツケー出すまでNGやからな？」

返事を待つて口をつぐむ。

ラーヴァキアはせめてもの反抗に黙っていたが——

「わかりましたか」

マーテスラに促されて仕方なく、

「——概要は。詳細で不明な点は多々ありますが、要は魔法の国の魔法少女——」

「魔女っ子や！」

ラーヴァキアのささいな言い間違いに、なぜカリファは目くじら立てて、

「変な呼び方すんなや！ 先輩、頭かじられてまうやろ！ 魔法少女やない！ 魔女っ子！ その大事、ごつつう大事！」

よくわからないが大事ならしい。確かに呼称——組織や個人名を間違えるのは失礼ではある。

珍生物に礼儀を尽くすのは抵抗があるため、あくまでマーテスラに向かって、

「——失礼。魔女っ子の運営に協力し、教育機関に潜入。時が来れば戦闘をして敗北に見せかけて撤退。以上をもって任務完了、という認識で宜しいでしょうか」

「ま、大体そんなトコやな」

と、えらそうにリファ。

「おおざっぱにわかっとならそれでええ。細かいことは都度都度テキストに教えたるから。なら、そうやな——来週……四日後あたりに転校して来る感じでよろしゅうな。」

あ、あと——

なんかジブン、マホーノクニ、て、呼び方がなんかカタいねんな。

もーちよっと夢とか希望とか込めて、ふんわり柔らかに、まほうの国、て呼べんのか？」

珍生物風情が発声ニュアンスにまで細かい注文をつけてくる。

反感は当然あったが、逆らっても文句を言われた上で、最終的にこちらが引かざるを得なくなるのはこれまでのことでよくわかった。ラーヴァキアは仕方なく、

「……マホーの国……？」

「まだちよっとカタい」

「……まほうの国……？」

「そーそー！ 今の！ ええ感じや！

ジブン、やればできるやんけ！

ほんなら色々、そんな感じでよろしゅうな」

まくし立てると、ぼんつ、と両手を打ち合わせる。
 白とピンクと黄色との、花びらのようなものが舞い散って、それらがどこへともなく消えた時には、ライトグリーンの珍生物の姿も消え去っていた。

……はあああああ……

深いため息——に翻訳された感情は、残された、ラーヴァキア以外の三人から。

「いたなあ……こんな所に……」

とギナザが憂鬱ゆううつにつぶやけば、

「いましたね」

マーテスラは淡々と。

「まさかこんな辺境の星でねー」

どこかひとごとのようにカノーフォも。

「——ご説明を——！」

ラーヴァキアは、かなうはずもない絶対者たちに、物怖ものおじすることさえも忘れて問いかけた。

「なぜ我々マズガミアが、あんなもの言うことを聞かねばならぬのですか！」

三人はしばし沈黙してから、

「……おおよその見当はつくのではないかと思うが……」

口を開いたのは征帝ギナザ。

「お前が我々の仲間として加わる——いや、お前が生まれるよりもはるか昔。

我々は一度、まほうの国に出会って戦いを挑み——敗れたことがあるのだ」

その答えは、予想していなかったわけではない。

だが、信じられない——いや、信じたくなかったのだ。無敗のはずだと思っていたマズガミアが、自分の知らない昔のこととはいえ敗れていたなど——

「あれは……大変でしたねー」

とマーテスラがしみじみこぼせば、カノーフォは笑いながら、

「いやー。『ボロクソ』とか『けちよんけちよん』って言葉はこんな時のためにあるんじゃないかとさえ思ったよ」

「そのままですかっ!？」

「そのままだったのだ」

とギナザ。

「あれから我々も力をつけたが、それでもなお、まほうの国に勝てるイメージは全く浮かばぬ。精神的な意味ではなく、現実的に戦力分析をしての話だ。

奴らの要求を唯々いいだだ諾々と呑むのが口惜くししくない、とは言わぬ。

が、反感に流され、さほど無理なく呑める程度の要求を蹴けって敵対するのは愚行。

ゆえにラーヴァキア、お前は全能翻訳機ウエム・ジノの機能を使い現地人類になりすまし、まほうの国からの要求遂行に尽力せよ」

感情的にはやはり納得できないが、ラーヴァキアには、栄えあるマズガミア帝国幹部の一員とし

ての矜持がある。任務とあれば遂行に全力を尽くすのみ。

「――任務了解しました。」

このラーヴァキア、全身全霊をもって、魔女っ子の新たな敵となつてごらんにいれます――」

かくて――

侵略帝国マズガミアの幹部、機械生命体ラーヴァキアの、地球での生活が始まったのだった